

## 水産孵化場場内向け広報紙

小出展久

水産孵化場の企画室は平成5年7月に室長と主査の2名体制でスタートしました。企画室はそれまで水産孵化場にはありませんでしたが、情勢の変化に俊敏に対応できるようにと設置されました。初代企画室長は既に道職員を退職されている今田和史氏、主査には松尾圭子氏が就任しています。平成6年には二代目室長として現中央水産試験場副場長の小島博氏が就任しており、この時に「企画室からのお知らせ」という場内向け広報誌が誕生しました。記念すべき第1号は平成8年6月20日。A4 2段組の一枚物で、白黒印刷で場員に配られました。この「企画室からのお知らせ」は平成9年5月20日まで通算15号が発刊され、場員間の情報の共有化に役立ちました。このような場内向け広報誌は次の室長にも継承され、同年8月4日には名称も新たに“Hokkaido Fish Hatchery Headline News”とあか抜けたタイトルになり、場員に配布されました。原盤はカラーで印刷されましたが、場員には白黒コピーで配られました。毎号違った魚のイラストが隅に描かれており、次は何のイラストかと楽しみでもありました。執筆者は三代目企画室長杉若圭一氏、現さけ・ます資源部長です。ヘッドラインニュースは室長在任期間2年8ヶ月でなんと123号を発刊し、一部はマリンネット上でも公開されていました。平成12年4月、企画室長は現道南支場長伊澤敏穂氏に変わりますが、このころから水産孵化場は体制整備への動きが加速していきます。伊澤室長の後、平成15年6月に企画室長は現計画管理室長小林美樹氏に引き継がれますが、体制整備への移行期の煩雑な業務の中、企画室から発刊される広報誌はありませんでした。水産孵化場は平成16年7月に新体制への整備を行い、資源管理部、養殖技術部、病理環境部の研究3部を、さけ・ます資源部、内水面資源部、養殖病理部の新研究3部体制にし、えりも、真狩、宗谷の3支場を手離すとともに森支場を試験池とし、中標津に道東支場を、網走に道東内水面室を新設しました。熊石支場、増毛支場もこの時、道南支場、道北支場へと名称を変更しています。この新体制により、企画室も新たに情報主査を加え、3名体制に拡充されました。私が企画室長に就任したのは平成18年4月、情報主査には引き続いて遠藤智樹氏が、企画主査には神力義仁氏の後任と

して中島美由紀氏が就任しています。新体制になって少し落ち着いた頃合いということで、休止していた場内向け広報紙を復刊することにしました。熟考の末名称は“きかく室”。漢字表記の“企画”ではなく、ひらがなで“きかく”とし、やわらかさを出したつもりでしたが、代わり映えしないとおしかりも。新しい広報紙“きかく室”は私の在任期間1年2ヶ月の間、35号を発刊して閉じましたが、引き継いだ竹内企画室長が同じ名称で、号数も引き続いて発刊を続けてくれています。場内向け広報紙“きかく室”は原則として場員のみを購読対象にしていますが、OBの方にもみてもらえるように外部から閲覧できるようになっています。詳しくは企画室までおたずね下さい。

企画室のような立場にいと研究部にいたときは異なり、水産孵化場という組織が北海道の中でどんな位置にいるのか、どんな位置にいないのかよく見えてきます。各部や各科も水産孵化場の中でどのような位置にいるのか、また、どうあるべきかが見えてきます。場内向け広報がそんな再認識の手助けになればと思いました。小さな機関でも人と人の意志の疎通はできているようではなかなかできないのです。このような場内向け広報紙が場内の情報を共有化し、それぞれの人の橋渡しになって仕事への励みになれば幸いです。最後に発刊123号を誇ったヘッドラインニュースの最終号、“これにて失礼つかまつる”の記事から一部を紹介して筆を置きます。「このニュースを発行した目的は皆さんに孵化場の仕事を大局的に把握してもらうこと。そのための情報提供の手段でした。その背景には、水産孵化場という試験研究機関が何のためにどういう仕事をしているのか、という姿が外から見ても中からみても希薄になっていると感じたからです。(中略)自分が所属するセクションの中で、水産孵化場という試験研究機関の中で、道の研究機関全体の中で、そして道庁という大きな組織の中で自分は何のために何をなすべきなのか、何ができるのかをいつも考えている必要があると思います。(2000年4月3日発刊No.123より)」

(こいでのぶひさ：養殖病理部長)

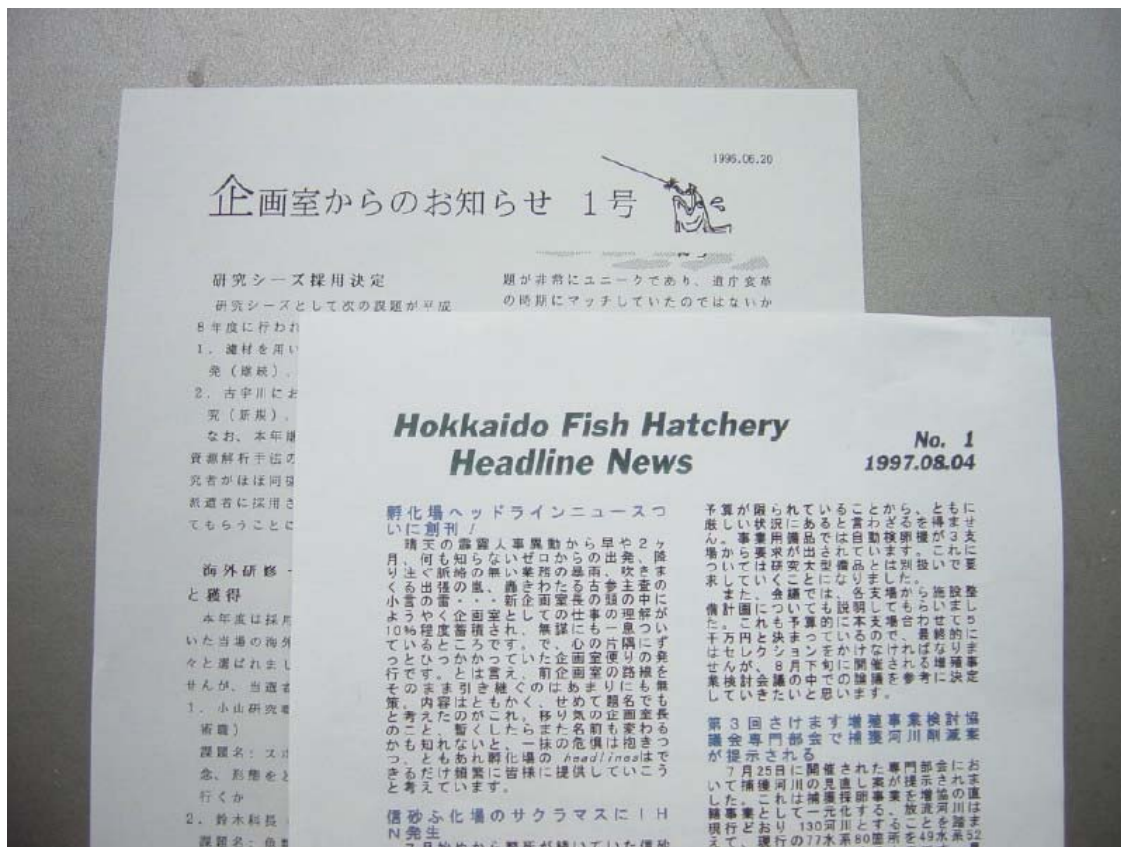


図1 記念すべき場内向け広報紙  
初代「企画室からのお知らせ」(奥)と二代目「ヘッドラインニュース」(手前)の創刊号



図2 復刊した三代目「きかく室」の創刊号(左)と最終号(右)